

滋賀大学  
教育学部紀要

第 65 号

---

H.Asperger と「アスペルガー問題」  
—アスペルガー症候群理解の前提として—

窪 島 務

**H.Asperger and "Asperger-problem"**

Tsutomu KUBOSHIMA

---

滋賀大学教育学部

2 0 1 5

# H.Asperger と「アスペルガー問題」 —アスペルガー症候群理解の前提として—

窪 島 務

## H.Asperger and "Asperger-problem"

Tsutomu KUBOSHIMA

### Abstract

In terms of diagnosis category, Asperger-Syndrome has been revised in DSM-5 and moved into one unital diagnosis category as an autistic spectrum disorder (ASD), but this category continues to be used in the clinical situation. To understand this disorder, the DSM and ICD classification systems are neither enough for diagnosis nor educational treatment. Here, apart from the diagnosis viewpoint, another theme exists. Specifically, the kind of educational perspective and methodology used was very important when H. Asperger observed his children. He called himself "Kinderarzt und Heilpädagoge (pediatrician and remedial-educator)". Therefore, we think that the background to H. Asperger's thesis about "autistische psychopathen" (autistic psychopathy) must be considered. And, at such a time, the following points should be discussed. (1) Relationship with "Austrian Heilpädagogik". (2) His methodological viewpoints, especially, the concept of "Ganzheitlichkeit" (integrated), and (3) His attitude to "NS eugenics".

キーワード：ハンス・アスペルガー、アスペルガー症候群、自閉性精神病質、治療教育学、教育的なもの

### はじめに 「アスペルガー問題」

今日、子どもと教育の世界で最も熱いトピックスの一つがおそらく発達障害であり、なかでもアスペルガー症候群を巡る問題であろう。アスペルガー症候群の本態は何か、高機能自閉症との異同、診断と処遇、予後の問題を巡って論争が行われている。2013年6月に改訂されたDSM-5は、広汎性発達障害(PDD)とともにアスペルガー症候群を診断カテゴリーとしては廃止し、自閉症スペクトラム障害(ASD)に一本化した。しかし、それによって議論が収束するどころかいつそう対立と論争は活発になっている。これらはアスペルガー症候群の概念、症状論、診断などを巡る研究上、教育実践上の問題群である。これらのアスペルガー症候群をめぐる議論とは別の、もう一つの「アスペルガー問題」が存在する。「アスペルガー問題」を取

り上げる意義は、これを解決することなくして、アスペルガー症候群の本態、とりわけ治療と教育の問題、発達の見通しを適切に解決することができない、という関係である。

H.Aspergerは、英語圏では1981年にL.Wingが紹介するまでほとんど知られていなかったが、ドイツ語圏ではよく知られていた、という評価が一般的である。しかし、「よく知られていた」のはHeilpädagoge(治療教育学者)としてのAspergerであって、自閉性障害の第1発見者としてのH.Aspergerではなかった。更には、治療教育学者(Heilpädagoge)としてのアスペルガーの評価は、ドイツ障害児教育学の世界では決して高くはなく、病理学的障害児教育の代表格としてむしろ否定的であった。Heilpädagogikは、日本語では通例、治療教育(学)、英語ではremedial education、

curative education と訳される。Heilpädagogik の概念は、歴史的な概念に属するが、特殊教育 (Spezielle Pädagogik, Sonderpädagogik)、障害児教育 (Behindertenpädagogik) などが学校教育、とりわけ知的障害児学校の制度的制約に縛られる傾向があることに対して、ドイツ障害児教育学の代表者の一人であるミュンヘンの Otto Speck(1991) は、今日においても全体性原理と補完的原理 (Ganzheits- und Ergänzungsprinzip) の観点から指針的概念として Heilpädagogik を採用している<sup>1)</sup>。

今日のオーストリアでは「アスペルガー賞」ももうけられ顕彰が行われている。しかし、アスペルガー症候群に関する限り、オーストリアにあっても H.Asperger の「自閉的精神病質」は、「1944 年の最初の記述以来忘れ去られていた」(Kathrin Hippler 2008) という状況であった<sup>2)</sup>。M.Berger (2007) も、1981 年に再発見されるまで「(1943 年の) 学位論文は忘却された」、H.Asperger は「古典」に属するにもかかわらず、彼に関する文献は断片的なものを除いて皆無であることが不可思議である、と述べている<sup>3)</sup>。Groeger.H. によれば、H.Asperger は、1940 年のウィーンで開かれた小児科学ドイツ連盟第 47 定期総会で講演を行い、そこで「私が "自閉性精神病質" と名付けた障害児の 1 グループが非常に大きな教育的困難をもたらしている」と述べ、また 1942 年の青少年精神医学と治療教育学についての講演においても「われわれは意図して、特に接触困難のある形に対する、例えば、"自閉性精神病質" に対するタイプ概念としての有用性 (Brauchbarkeit) について述べる」としている。1944 年以前から「自閉性精神病質」という概念を積極的に使用していることがわかる<sup>4)</sup>。

アスペルガー症候群は、1981 年以来、世界的に急速に注目されることになるが、2013 年の DSM-5 ではその病名が消え、自閉症スペクトラム障害に統一された。とはいえ、アスペルガー症候群に関しては論争が続いており、理論的、臨床的に解決に至ったわけではない。また、アスペルガー症候群の第一記述者としての H.Asperger その人については、これまで殆ど知られていなかった。自閉症関係の代表的な国際専門雑誌 (『自閉症と発達障害誌』(2007 年

37 巻) に、1938 年の H.Asperger 論文の存在について 1 ページ余の短い記事が掲載された後でさえ、ほとんどの自閉症の専門書、入門書で 1938 年論文は黙殺され続けている<sup>5)</sup>。しかし近年、娘である Maria Asperger Felder やオーストリア治療教育学の関係者の調査や証言によって、これまでほとんど明らかにされていなかった H.Asperger の研究方法や人間像がかなり明らかにされている。

「アスペルガー問題」を取り上げる意義は、これまでほとんど注目されることがなかった H.Asperger の研究者及び臨床家としての姿勢に多くの共感するところ、学ぶべきところを見いだすことができるからであり、更には発達障害児の本質的理解と実践にとって、「自閉性精神病質」の研究者及び治療教育学者としての Hans Asperger の方法論的志向性は重要な示唆を与えるものであると考えるからである。Frith,U.(1991) も Hans Asperger を理解するためには、Heilpädagogik または remedial education を理解することが必要である、と述べている<sup>6)</sup>。しかし、その内容、特質については何も触れていない。Asperger を理解するためだけでなく、彼の「自閉性精神病質」を理解するためにこそ、彼の方法論の根底にあるオーストリア治療教育学とは何かを理解する必要があるのである。H.Asperger は、「われわれは、Heilpädagogik を、生物学に基礎づけられた異常児の人格についての知見に基づいて、子どもと青少年の知的・感覚的障害、神経及び心の混乱 (Störungen) に対する教育方法を探求する学問である、と呼びたいと思う」<sup>7)</sup> と述べているが、その意味するところをひもとく必要がある。

Feinstein(2010) は、Kanner と Asperger の二人の個人について二人を知る人からの知見も含めてかなり最新の情報を伝えている。しかし、われわれがアスペルガー症候群の本態の理解と教育的指導にとって最も重要と考えている H.Asperger の研究方法、子どもに対する姿勢、臨床的観察の方法について Feinstein(2010) は多くを語っていない<sup>8)</sup>。

Hans Asperger は自らを「小児科医かつ治療教育学者」であると語っているように、医師で

あると同時に教育学者としての側面を自認していた。それは、オーストリア治療教育学の指導者の一人としての側面であるが、さらに治療教育学的実践を通して「自閉性精神病質」（アスペルガータイプ）を見ているという点で特に重要である。というのは、自閉症に対しては教育的対応の意義が語られる（フリス）一方、オーストリア治療教育学（Heilpädagogik）の理論的、実践的指導者としての H.Asperger の具体的かつ本質的である教育的なるもの、その方法論については語られることが少ないからである。H.Asperger の「自閉性精神病質」、今日のいわゆるアスペルガー症候群の理解にとって H.Asperger の「人間的理解の方法的視点」は、不可欠かつ不可分であるからである。この関連を欠いたアスペルガー症候群理解は不十分なものにならざるを得ない。「自閉性精神病質」（アスペルガー症候群）の第 1 報告者としての H.Asperger のみならず、オーストリア治療教育学の指導者としての H.Asperger の全体像を描くことは、われわれが発達障害の理論と実践を発展させるために有益である。

Frith(2012) は、自閉症に対する教育の意義として次のように述べている<sup>9)</sup>。「自閉症は現在、行動の特徴によって特定されている……。行動の特徴はやかいかです。というのも年齢や能力や根底にある病的状態とは関係の無い違いを引き起こす多くの因子によって変化するからです。……。それらみな多くの要因、すなわちその人自身の内的資質、受けた教育、外部から得られた支援などで決まります。支持的教育環境の影響がとても大きいことがわかると納得がいきます。その影響によって、元々あった問題が覆い隠されることさえあります」(P.140-141)「もしあなたが親や介助者や教師だったら、知っておく価値のあることが 1 つあります。それは、発達は大きな力だと言うことです。……。今のところ、すぐれた実践が存在しているだけで、何が最適な実践かと言うことに関しては意見の一致がある分けではありません」(162-163)。要するに、自閉症は環境的要因、とりわけ教育によって大きく姿を変えるが、教育の作用が何かはよくわからない、ということである。また、自閉症が現在では「行動の特徴によって特定さ

れる」ことは「自閉症という障害」のアセスメントレベルでは必要かもしれないが、「自閉症のある人」の全体的理解、人格発達と教育的理解としては「行動の特徴」からのみみる方法論に大きな限界があり再考の必要がある。この問いに答えるのは人格発達の理論と教育学の責務であろう。

筆者は次のような諸問題を「アスペルガー問題」と呼び、考察する必要があると考える。

① H.Asperger の子ども観の背景にある独特の治療教育学（Heilpädagogik）のとらえ方および方法論的意識の具体像を明らかにする課題である。重要な点は Hanselmann と並んで第 1 回国際治療教育学協会設立の 1 人であったというような社会活動的側面ではなく、むしろドイツやスイスの治療教育学との違い、オーストリア治療教育学の独自性とその方法論的立場などが課題となる。石川が指摘するように、これまで H.Asperger と治療教育学の関係はほとんど問題にされることがなかった<sup>10)</sup>。神内（2007）は「ハンス・アスペルガーによる『自閉性精神病質』と『治療教育学』」という題名の論文を書いているが、内容的には治療教育学にはほとんど触れていない<sup>11)</sup>。加戸ら（2013）は、当時のウィーン大学の治療教育のルボを紹介している<sup>12)</sup>。しかし、H.Asperger の小児科医としての側面（医学）とオーストリア治療教育学の指導者（教育者）としての側面の「統一」として、H.Asperger の子どもに対する姿勢、見方、研究方法の特質を理解することは、「自閉性精神病質」の本質の理解に不可欠である。

② H.Asperger には、時代精神・流行思考様式（パラダイム）に関連する、人間と発達についての科学的（学問的）思考の有り様に関する方法論的態度の問題が基底にある。「アスペルガー治療教育学」の方法論的側面である。1938 年論文の時代に、彼の前にあったのは近代科学の発達期にあつて実験心理学をはじめとする実証科学（ヘーゲル的に言えば「精密科学」）の台頭に対する危惧、Heilpädagogik 初版本が出版された 50 年代は「近代科学の時代発展による個々の人間人格と社会共同体の危機（Bedrohung）」「全体的見通しを喪失させる危険をもたらす……今日どこでも観察されるますます細分化される

特殊領域」<sup>13)</sup>、そして彼の没後すでに30年以上が経過した今日の情報化時代の認知科学をはじめとする行動科学の精緻化と人間人格の際限の無い細分化及び遺伝還元主義の極地、巧妙なる擬似的統合の時代における弁証法的思考方法の要請等々、これらがすでに1930年代のH.Aspergerに確かなものとして形成されていたことを検証する課題である。

③ H.Aspergerが「自閉性精神病質」というタームを用いたのは、Leo Kannerが自閉症の報告をした1943年の翌年、1944年の学位論文の発表であるということが「通説」となっているが、実はAspergerは、1938年の「ウイーン臨床週刊医学雑誌」(Wiener klinische Wochenschrift 51.S1314-1317)に「精神的異常児」(Das psychisch anormale Kind)という題名で講演記録論文を掲載しその中で、「自閉性精神病質」(autistische Psychopathen)というタームを使用して特徴的な子どもについての報告を行っているのである。カナーが「早期小児自閉症」を報告した1943年に先立つこと5年である。「自閉症」の第一発見者(報告者)は紛れもなくカナーではなくH.Aspergerである。それ故、最近では、カナーは「H.Aspergerを盗作した」という過激な主張も行われている<sup>14)</sup>。ところが、これほど重要な講演と論文にH.Asperger自身が生涯一言も触れていないのである。彼がまったく黙して語らなかつたのは何故であろうか。

④ 日本の研究者を含むWing以後の欧米の研究者の間では、H.Aspergerの論文にある予後の良さ、社会的適応の高さについての主張については「楽観的過ぎる」という否定的な評価が多く見られる。1938年の講演と論文はナチスの安楽死法に対する抵抗としての方便であったのか。成長してからの社会的適応力が高く、特異的能力の有用な発揮があるというアスペルガータイプの特徴が、彼のHeilpädagogikの実践的方法による発達可能性の開化と見られることについて検討する必要がある。

⑤ H.Aspergerが、ナチスドイツの民族優生学、障害者撲滅政策(T4計画)に対していかなる態度を取ったのか、彼の民族優生学はいかなるものであったのか、公式には戦後まもなく、ウ

イーン大学の教職を認められているのでナチスとの関係は深くはなかつたことは事実であろうが、思想的、理論的にはどのような関係にあったのかという問題は未解明のままである。娘のM.A.Felderは、H.Aspergerについて語るとき、話題がすぐそこに行くことに対して不満を漏らしているが、避けられない問題であろう。

⑥ H.Asperger自身がアスペルガー症候群であったかどうか、という週刊誌的な議論もとりあげられよう。Feinstein(2010)も、KannerとAspergerの二人に直接会ったことのあるスコットランドの小児精神科医のFred Stoneの言葉として、H.Aspergerがまさしくその名前をつけられた症候群である、と伝えている<sup>15)</sup>。以上の全体が「アスペルガー問題」を構成する。これらの「アスペルガー問題」、特に①から④の問題を解決することなく、「自閉性精神病質」すなわち後のアスペルガー症候群についてのHans Aspergerのすぐれた知見の源、したがってアスペルガー症候群の本質的理解についても正しい評価を得ることはできない、と考える。Hans Aspergerは1980年に、Wingが「アスペルガー症候群」を英語圏に紹介した1年前に生涯を閉じているが、幸いにも今世紀に入り、オーストリアにおいてさまざまな証言があつめられ、また娘のMaria Asperger Felderによって日記の一部が紹介されるようになって、彼の生活者としての側面、研究方法論に関する態度などが明らかになってきた。1974年3月28日のラジオインタビューはその録音があり、今でも彼の肉声を聞くことができる<sup>16)</sup>。とりわけ、オーストリア治療教育協会(Heilpädagogische Gesellschaft Österreich, HGO)の雑誌"heilpädagogik" 2006年49巻3号の特集以降の諸論文、2010年にウイーンで開催されたアスペルガー・シンポジウムの講演記録の出版(A.Pollak編「ハンス・アスペルガーの軌跡をたどって—アスペルガー症候群の過去・現在・未来—」2015)、その他によってこれまであまり知られていなかったH.Aspergerその人の生涯と実像が明らかになってきた<sup>17)</sup>。われわれは、H.Aspergerの純粹に客観的な歴史的评价をしようというのではない。発達相談と教育指導の専門機関としての滋賀大キッズカ

レッジの実践にとって、アスペルガー症候群と学習障害を併存する子どもたちの発達の事実を明らかにし、確たる方法論的基盤を構築することがわれわれの念頭にある。われわれにとっての関心は、Hans Asperger の子どもに対する眼差し、アスペルガー症候群をはじめとする発達障害に対する研究方法論とその「治療教育学」の実践的意義である。こうした「アスペルガー問題」を解明することによってこそ、後の「アスペルガー症候群」(H.Asperger の "Das autistische Psychopathen") の本質を見極めることができる、と考える。子どもの姿は、それとして客観的に存在するのではなく、観察する側の見る目によって変化する。子どもの中に存在する本質的傾向性と関係の中での変化可能態の統一的な姿として、子どもを見ていくことが重要であり、その一つの鍵が H.Asperger にあると考える。

### 1. 「オーストリア治療教育学の祖 (Stammvater)」

Heilpädagogik (治療教育学) がなんであるかについては、第一に、医学と教育学の間の統合であるが、第二に、オーストリアに特別なこととして、小児精神医学と小児科学との間の緊張関係を下にして論争が生じる<sup>18)</sup>。Heilpädagogik という言葉は、スイスで Georgens と Deinhardt によって 1860 年にはじめて用いられた。オーストリアでは 1911 年に、ウィーン大学小児クリニックに Heilpädagogische Abteilung が設置されたのを始まりとする。その基本理念は、「孤児及び虐待児の保護のためのペスタロッツ連盟」の理念に基づいており、Dr.Erwin Lazar が創始者となった<sup>19),20)</sup>。

重度の障害児を含めて、その人格の全体性を捉えること、教育の可能性についての主張は、H.Asperger に特徴的なものではなく、スイス及びオーストリア Heilpädagogik に底通する基本的原理であった。スイス治療教育学の Hanselmann も知能検査を否定的に見ていたという<sup>21)</sup>。H.Asperger の特質は、それらを彼の「自閉性精神病質」(アスペルガー症候群) の子どもたちに対する治療教育実践の中で具体的に明らかにした点にあると思われる。

E.Tatzer(2006) によれば、Heilpädagogik には、3つの潮流がある<sup>22)</sup>。第一の潮流は、ウィーンに始まる Theodor Heller, Erwin Lazar, Josef Felder, そして H.Asperger による、より医学中心の一派である。第二の潮流は、スイスとドイツを拠点として発展した Heilpädagogik を教育学の一分野ととらえる流れである。この流れの最初の代表者として Heinlich Hanselmann と Paul Moor をあげることができる。第三の潮流として Rudolf Steiner をあげることができるであろうが、その人間学的 Heilpädagogik は全く独自の発展を遂げた。そうした中で、H.Asperger は、オーストリア治療教育学の伝統を引き継ぎながら、独自の Heilpädagogik を形作っていった。オーストリア治療教育学の独特の特徴の形成に、H.Asperger の影響は絶大であった<sup>23)</sup>。E.Tatzer(2006)、S.Tschiesner(2011) は、H.Asperger をオーストリア治療教育学の祖 (Stammvater) の一人と呼ぶ。余談だが、Tatzer(2006) と Tschiesner(2011) の論文は、題名が全く同じであるだけでなく、内容も相当に似通っている。

H.Asperger は、1968 年の『治療教育学』で、治療教育学を構成する 5 つの学問分野を挙げているが、治療教育学は、それぞれの学科の総合ではなく、それ自身、一つの固有の、有機的にその特殊な条件から成長する学科 (Fach) である、と述べている。5 の学問分野は、精神医学、小児科学、心理学、社会科学、そして教育学をさす。前述のように、彼は Heilpädagogik を、「逸脱した児童の人格についての生物学に基づく知識、とくに子ども及び青少年の知的及び感覚の障害、神経的及び心的混乱 (Störungen) の処遇に対する教育的方法を探求する学問と呼ぼうと思う」と述べているが、それは、広い意味での「教育的なるもの」だけ (nur das Pädagogische) が人間に対してよりよいものに変革すること、すなわち子どもの様々発達可能性から熟考された人間の導きによって最善のものを選び出すことができるからである<sup>24)</sup>。彼は、スイス治療教育学の創始者の一人である Hanselmann を批判しつつ、その弟子で「治療教育学は教育学であり、それ以外の何物でもない」という有名な言葉を残した Paul Moor に与

する。

H.Asperger はオーストリア治療教育学の特質について次のように述べている。

「この名称はオーストリアにおいては、ドイツやスイスにおけるよりもはりに包括的な意味で使われている。ドイツでこの名称が使われる場合には、中でも特殊学級の教育学、特に精神薄弱児の教育学という理解のされ方であり、また、スイスにおいても、異常児との結びつきで純粋に教育学的な仕事のみが考えられている。(この点は、ハンゼルマンの「治療教育学序説の中で最も明確に述べられている」)「しかし、われわれはこの「治療教育学」という表現を愛している。治療教育学の中では、もちろん最も広い意味で使われる教育学的な仕事のみが、人間を本当によい状態に変化させるものであり、子どもにある種々の発達の可能性の中から、熟考された指導によって最上の可能性を選ぶことができるという点に信条がおかれている」<sup>25)</sup> H.Asperger にとって、治療教育学の根底に「人間理解への道」(Wege zur Menschenkenntnis)がある。そしてそれは、子どもを人格としての統一体(「統合されたもの」と見ることであり、人間を全体性として捉えることが彼の Heilpädagogik の核心にあった。「一人の子どもを、その全体の人格構造の中で、同時に、その子どもの個々の反応の中で正確に知ることは、治療教育学におけるすべての治療にとって不可欠の前提であり、既に治療の一部になっているのである」<sup>26)</sup>。

批判的合理主義的教育科学の W.Brezinka がなぜかウイーン大学医学部の治療教育学について詳細な文献的史料に基づく論文をドイツの代表的な『教育学雑誌』(Zeitschrift für Pädagogik)に発表し、その1章を“Hans Asperger:1932 bis 1957 und 1962 bis 1980”に当てている<sup>27)</sup>。

H.Asperger は、1931年3月26日医師資格を取得してまもなく、5月1日に Franz Hamburger の指導の下にあったウイーン大学児童クリニックに就任した。1932年秋から治療教育学部門(Heilpädagogische Abteilung)で仕事を始め、そこに治療教育的学童保育(Heilpädagogischer Hort)を設立している。

この学童保育については、Felder(2006)も、H.Asperger が治療教育ステーション(Felder はここを“Heilpädagogische Station”と記している)に、週3回開かれた“Lernhort”(「学舎」と土曜日の“Spielhort”(「遊戯舎」)の二つのHort(学童保育)を作り、そこで H.Asperger と子どもたちが親密に関わっている生き生きとした様子を記述している。しかし、それが何かについては明らかにされていなかった。ウイーンで詳細な文献探索を行った W.Brezinka(1997)は、Hort の一つ(Lernhort)が「知的に高く、しかし学習が困難な子どもたち“intelligente, aber lernschwierige Kinder)」の教育の場であり、他のHort(Spielhort)は「重度の精神病質の子ども(“schwierige, oft in beträchtlichem Grad psychopathische Kinder”)」を数年間にわたって教育する場であった、と記している。このHortにおける治療教育を通して H.Asperger は、彼の「自閉性精神病質」の構想を練り上げたのである。Franz Hamburger は、名うての国家社会主義者として知られているが、彼は H.Asperger の考え方、信条をよく知りながらも H.Asperger を高く評価し(学位論文審査報告書)、また H.Asperger がゲシュタポに2度にわたって逮捕されそうになったときにも救っている。H.Asperger は、戦後においてもそうした Hamburger を評価していることを1974年のラジオ放送でも語っている。

ところで、Brezinka は、戦後(1947年から1955年)ウイーン大学内部において、治療教育部門を独立した部門として設置する問題に関して H.Asperger と医学部教授会の深刻な対立があったことを記している。Asperger は、ウイーン教育省と同調して、特殊教育教員の養成課程を作ろうと努力していた。意見の違いは、H.Asperger が一貫して治療教育部門を独立させるがあくまで医学部の所属とすることを要求し、医学部教授会は、これを拒否して医学部の外に、すなわち哲学科に設置することを要求したことにあった。教育学は長いこと哲学科に属することが通例であった。結局、1954年教育省は、治療教育部門を独立した治療教育所(Heilpädagogische Station)とする決定を行ったが、哲学科にそれを受け入れる素地がないこ

とも明白であった。結局、診断、観察など医学部と連携を取りつつ独立した Heilpädagogische Station とすることに落ち着いた。医学部教授会の真の意図は不明であるが、学部教授会の自治を重視する教授会は、教育省が医学部の中に入り込むことをいやがったのではないかと推測されている。ともあれここに、H.Asperger の治療教育学に対する考え方が端的に示されていると言える。彼は、「治療教育学は教育学であり、それ以外のなにものでもない」と言った Paul Moor を高く評価したが、その実、彼の治療教育学は小児医学に基づくものであった。実は、この Paul Moor の有名な言葉は、H.Asperger の批判に向けられたものであるともいわれている<sup>28)</sup>。Antor と Bleidick 編『障害児教育学事典』(2001) も、H.Asperger の「小児精神医学と Heilpädagogik の等置」(Asperger 1952) に対して、Moor はすでに、Heilpädagogik は教育学であり、それ以外のものではないと批判している、と位置づけている<sup>29)</sup>。ミュンヘン大学教授であった Konrad Bundschuh(2006) も、Asperger や Meinertz によって Heilpädagogik は、「応用精神医学」および「応用青年精神医学」であると宣言された、と述べている<sup>30)</sup>。こうしたとらえ方は、障害児教育学の教育学としての学的確立を目指したドイツ障害児教育学ではむしろ一般的であった。Lotz,D.(2008) は、「おそらく、彼 (Moor) はこのことばで Heilpädagogik を「応用小児精神医学」と考え、またしたがって Heilpädagogik をむしろ医学的援助職と見た Hans Asperger を当てこすったのであろう」と述べている<sup>31)</sup>。その前半部分は、上述のようにドイツ障害児教育学における Asperger に対する一般的評価であるが、しかし、次節で見ると Heilpädagogik を H.Asperger が「医学的援助職とみた」とする後半部分は必ずしも当たっていないように思われる。

H.Asperger の治療教育学の実践は、次節でみるようにとりわけ子どもとの関係においてすぐれて教育的であったとしても、その学が教育学的であったかどうかは別である。H.Asperger の主著である『治療教育学』は、教育学者の目からすればその構成から内容に至るまでとも

教育学のテキストといえるようなものではない。保守的な批判的合理主義的教育学者である Brezinka にはとうてい認めることはできなかったであろうことは想像に難くない。Brezinka の批判は、治療教育部門を医学部に所属させようとした H.Asperger にまず向けられる。Asperger にとって、「特殊教育そのものは、- その理論は『治療教育学』と称するが-、診断、鑑別-および助言の課題に対して、二次的なものであった」<sup>32)</sup>。治療教育学を医学に属させようという H.Asperger と教育省の無益なこだわりは、行動障害児の診断と治療をますます小児科医の手に渡していくことを妨げることはできなかった、その結果、オーストリアにおける真の特殊教育研究とその理論構築を甚だしく遅らせることになった、と Brezinka は強く批判する。Asperger は、その後の教員研修においても十年一日のごとく同じテーマとケースについての講義を行った、と Brezinka の批判は辛辣である。H.Asperger の Heilpädagogik および教育学に関する概念および理論構成には、曖昧さ、明確さにかける点、一般論であるなどの批判も可能である。Datler(1988) の言うように、この点を理論的に曖昧にすることは許されない<sup>33)</sup>。さらに、「全体性」概念についても今日的な新しい批判的考察と意義づけが必要となる。その意味で、Brezinka の批判はもっともである。しかし、それによって「自閉性精神病質」(アスペルガー症候群) の子どもの治療と教育の実際に Asperger が行った「教育的なるもの」、子どもを観る方法、教育的関係のあり方などの今日的な重要な意義が減じるものではない。H.Asperger の治療教育学はドイツ学校教育の枠に収まらない人間教育としての教育学であること、その教育学の理論構成よりは内容に目を向ける必要がある。H.Asperger によって提起され、示唆された発達障害児、とりわけアスペルガー症候群の教育学を構築する課題は今日のわれわれの手に託されている。

## 2. H.Asperger の方法論的視点および治療教育学の特徴

M.Berger (2007) は、H.Asperger の治療教育学の特徴として3点をあげ、「青少年の全体性」(Ganzheitlichkeit des Jungen Menschen)、



「学際的であることへの確信」(Credo)、「学問的学科としての治療教育学」の独立性の視点は、今日的アクチュアリティを有している、と指摘する<sup>34)</sup>。Heinz GruberとAdolf Joksch(2006)も同様の指摘をしている<sup>35)</sup>。

### 「全体性」の回復—人間を細分化する近代科学への批判

H.Aspergerは、1934年4月から5月末までLeipzigとPotsdamで研修を行っており、施設長のPaul Schlöderから強い印象を受けている。彼は、旅行日記にその時の印象を次のように書き留めている<sup>36)</sup>。

「とりわけ、その教義は私には全く恐ろしく気に入らない。それは、外観(Anschein)は、全構築物としてまったく良くできており、われわれの見解に一致する。確かにまたしかし、多くの個別の点に於いて。明確な、診断的に良く使用できる諸概念によってうまく基礎づけられた構造。私は、もちろん、人がそれによって多くを知ることができること、そしてうまく仕事ができることを知っている。しかし、私は、Dr.Franklがいかに治療教育的診断に努めているか、あるいは如何にわれわれがそれでもわれわれの仕事にとって非常に良い諸概念をもっていかを考える。その諸概念は、われわれが専門用語(Jargon)で表現し、それをもって人がたとえば外部で全く異なるものを理解する(自閉的なものを考えてみよ!)。われわれが伝えるのが困難な、本質的な違いは、次のことにあるように思われる。ここでは、彼らは体系的に(systmatisch)に観察する。子どもの精神の個々の「層」、知能、心情(Gemüht)(これをめぐって多くのことがここでは逆立ちしている。まったくもってうまい概念だ)、態度、価値追求、ファンタジー、衝動、気分の基礎、運動・・・これらのひとつひとつの結果は診断において並列的に差し出される。これらの方法の欠点は、明白である。そこから人は、ひとつひとつの「層」(Schichten)の相互作用を余りにわずかしか知ることができない。人は、一人の人格の生き生きとした像をなら持たない。これらの関係において非常に好ましいもの、われわれのところのように、そう人間的な暖かさは存在しない。

すべてに対して、すべてにおいて、子どもにとって無限で、しかし不可避な、非常に強い共同の精神は生きられない」(Leipzig旅行日記 1934年4月14日)<sup>37)</sup>。医学の細分化、「極端な特殊化」に対する強い警戒感と批判は、まるで医学、教育学、心理学の行動科学—辺倒の方法論の蔓延する今日に対する批評であるように響く。

「もはやその小さな思考領域と研究領域を眺めることができない者は、生活において成長できないだけでなく、狭隘で、やせ細っており、また自身をその学問において滅ぼしかねない。創造的な着想もたずにその小さな被験者に入り込みかねない。われわれは小児科において、いやまさに今日の医学全体において、悲惨な帰結につながるある亀裂が現れていることを看過することは許されない」<sup>38)</sup>。

それは医師に「部分的なものに、なにか知的な非統合的なものに非常に悲惨にも近づきながら、常に全体的であること、全体を見ること、そして全体を行うことを要求する」(“immer ganz zu sein,das Ganze zu sehen und das Ganze zu tun”)<sup>39)</sup>

「全体性」に至る認識的方法が、「教育的なるもの」、「直観」・「観ること」(Schauen)であったと思われる。それは精神分析の批判として述べられた次の記述にも表れている。「生活の流れは、互いに反対の極の間の緊張関係の中にある数多くの作動原因が総合された結果であると考えるときにのみ、理解することができる」<sup>40)</sup>。

### 「小児科医かつ治療教育学者」—「教育的なるもの」

自分自身を「医師かつ治療教育学者(Kinderarzt und Heilpädagogie)」と呼んだH.Aspergerには、「その性格から“教育的なるもの”(Das Erzieherische)がより強くよみとれる。それは、彼の学問的業績に表れている」<sup>41)</sup>。H.Aspergerにあっては、「教育的なるもの」は、“Das Pädagogische”と“Das Erzieherische”が同義で使われているようである。

「われわれは、広い意味での、ただ教育的なるもの(das Pädagogische)のみが人間の人格をよりよいものに変革することができる、あるいはより正確に言えば、子どもの発達可能性か

ら最良のものを選択し発達させることができる、と信じている」<sup>42)</sup>。H.Asperger にとって、「教育的なるもの」は、彼の自閉性精神病質の子どもたちの発達可能性を見だし、人格の発達を実現する方法であり、子どもたちに対する態度、関わり方を指していた。

### 子どもを見る目 (Schauen)、まなざし

Maria Asperger Felder は、“Zum Sehen geboren. Zum Schauen bestellt” (「見るために生まれ、観るために召される」) という同名のタイトルの論文を2本書いている。それぞれ一部内容が重なるところがあるとは言え、ページ数も主たる内容にも違いがあり、独立した論文である。

“Zum Sehen geboren. Zum Shauen bestellt…”は、Hans Asperger が好んだゲーテのファーストにあるフレーズである。Hans Asperger は、クリニックにおける彼の70歳の誕生祝いの席でこの一節を引用している<sup>43)</sup>。Hans Asperger は、臨床における子どもの観察を非常に重視したが、その際、このフレーズに沿って、子どもを「見る」(Sehen) だけでなく、「観る (視る)」(Schauen) ことの重要性を繰り返し説いている。そして、Maria Asperger がこのフレーズを論文のタイトルとして繰り返し用いているということは、彼女にとって、Hans Asperger の子どもを見る眼ざしにこそ、彼の(彼女の父親の)真骨頂を見ていると言うことであろう。

Maria Asperger Felder(2006) は、「直接に『観ること』、認識の全体的機能を失ってはならない、そこでは直感的、本能的、“前知能的能力”が役割を演じる」「私は“外側から”指示を与えたり、冷たくそして突き放して観察するだけではなく、子どもと遊んだり会話をしたいのです」というH.Asperger のことばを引用している<sup>44)</sup>。H.Asperger は、ゲシュタポに2回逮捕されそうになり、その度に師であったHamburger に助けられているが、なぜ逮捕されそうになったのかという点について、かつての同僚は、おそらくH.Asperger が重度の障害児といっしょになって病棟の中を走り回っているところを見つけれられたのであろう、と語っている。子どもに対するH.Asperger の一面を

うかがわせる<sup>45)</sup>。

H.Berger(1976) は、H.Asperger の70歳の誕生日にあたって、人間からただの研究対象を、すなわち、「学問というものからの分裂」をなす当時の「時代」の不快さを強く感じていたであろう、と述べている<sup>46)</sup>。こうしたことから、H.Asperger は、単に外側から「見ること」、分析することではなく、子どもの内的なもの、子どものうちに形成された「全体性」を直接的に「観ること」、直観的に「感じ取ること」(Spüren) を重視した。とはいえ、H.Asperger が分析的観察を否定していたのでないことは、1944年論文の4例の記述を観ればわかる。Asperger は知能検査を使用している。ただし、使用方法および解釈がマニュアルとは異なっていることはうかがえる<sup>47)</sup>。分析と統合という弁証法的認識論的方法を意識的に用いていたとも言える。それは、直観(Intuition)に関する記述にも現れている。

### 教育者の資質及び教育指導の原理

H.Asperger の教育的な関係論にも独特の直感的、主観的なものを重視する視点が様々に述べられている。

「接触の概念に含まれるものは、非常に密接な精神的関係であり、その関係は人間と人間との間で演じられるので、非常に主観的に叙述するより他にはないものである」<sup>48)</sup>。接触とは、人間的交流を指す。

また、H.Asperger は、人格は直接的体験によって得られるのであり、知識に、すなわち細分化されたチェックリスト、システム化された診断項目に合わせて理解すべきものではないという。「人格の認識は、むしろ、創造的な行為、『芸術的な』行為である。『知識』はすべて背後に後退させなければならず、意識の深い部分において単に背景としておく方がよい。人間に関して正しい知識を持っている者には、人格を『直接に』体験することが必要であり、間接に、すなわち習得した体系に合わせる必要はない」<sup>49)</sup>。

Wurst(1976)によれば、治療的アプローチと同様、診断的アプローチに子どもへの2つの接近方法がある。一つは、組織された方法、もう

一つはインスピレーションされた方法である<sup>50)</sup>。

組織された方法というのは、一定のシステムと考えられる。それは、段階的に経過する、煉瓦を積み上げるようなものである。インスピレーションは、何ら系統立った順序とは考えられない。それは、自身の共感的能力に、子どもとの付き合いの経験に、人間理解に立脚する。その根本は、感情の領域にあり、合理性の領域にはない。われわれが子どもに相対する殆どすべての状況にあって、彼の行為は情動によって統制される。この行為の了解にとって、しかしまたわれわれ自身の直接的な反応と活動にとっても、自己の情動性が第一に関与する。われわれの実験室的一中立的態度に到達し得ないばかりか、そうすべきものでもないので、われわれは子どもへの関係においてわれわれ自身のやり方とともに計算に入れ吟味するように努めるのである。以上 Wurst(1976)の「感取されたもの」についての論述である。近代科学がシステム化されるに従って細分化され、人間が生る生活から切り離されて捉えられる方法への抵抗としてか、新しい「統合されたもの」としての全体性か、問われるところである。このとらえ方は一見すると、精神分析的、カウンセリング的アプローチと同化しそうであるが、H.Aspergerは、深層心理学、心理療法を批判する。それは、彼の子どもの自閉性精神病質とその発達のとらえ方に関連があると思われる。H.Aspergerは、自閉性精神病質の子どもたち、すなわちアスペルガー症候群の子どもたちに対しては、あたかも疑問の余地のない当たり前のこととして要求する、という指導の有効性についても述べている。このとき、非常に重要なものは、接触到困難のある子どもに対する時の教育者の感情状態であり、教育者は「感情をおさえて」、すなわち冷静で現実的な心のもち方で、仕事をしなければならない。それ故、あふれるような愛想もいらないし（能力のない教育者はこの誤りをしばしば犯し、子どもを深い混乱状態におとし入れてしまう）。愛情あふれる教師の感性はしばしば彼らをいらいらさせ、混乱させ、情動の暴発を誘引する。この点は、今日のわれわれの観察とぴったり一致する。

H.Aspergerの方法論的特質、そのHeilpädagogikはきわめて具体的で実践的である。以上、その具体的な姿として、子どもの「全体性」を把握する視点、「教育的なるもの」、子どもを観る感性、直観的な「観ること」、教育方法の視点を見てきた。これらを通じて、H.Aspergerは、彼の「自閉性精神病質」の発見に至ったのであるが、この方法論は、人間を主体から切り離して外から観察する行動科学、認知科学とは人間理解の次元を異にする。フリス(2012)は、アスペルガー症候群の診断の曖昧さは、行動観察に依拠する限り避けられない、認知レベルから行動を説明する必要がある、と述べている。しかし、これは、Aspergerの認識論的方法とは逆方向である。認知科学的方法が精緻になればなるほど、Aspergerから遠ざかることになる。認知科学的方法が不必要なのではない。しかし、それは、観察者にautistische PsychopathenのAsperger的理解、「全体性」と、「直感的」な共感的人間理解を要請する。Autistische Psychopathenは、全体性と人間的共感を直感的に把握する観察者にのみその全一なる姿を見せる。それこそAspergerが見いだした子どもの姿であると考えられる。

#### 予後と教育指導の意義

Hans Aspergerが、彼の子どもたちの予後がよいことを述べていることはよく知られているが、これを巡っても議論がある。今日のアスペルガー症候群のある人々の思春期、青年期はむしろ他の精神障害などを発症する傾向が強く、ハンス・アスペルガーはこの点について楽観的すぎる、という評価がある。実際、アスペルガー症候群の子どもたちの予後はどうであったか？

この点に関して、ハンス・アスペルガー自身とその同僚が子ども時代に診断した人に対する追跡調査が近年行われ、検証されている<sup>51)</sup>。「自閉性精神病質」ないし「高い知能を持つ自閉症傾向」という診断のある181人からインタビューができた47人の現在の状態が調査された。インタビュー当時の年齢は23歳から62歳の間、平均は40歳であった。全体としては、集団として「非常によい」状態と評価された。41%は、よい収入を得ている。35%は、平均的

収入を得ている。15% ちょうどか、低い収入を得ている。9% が特に低い収入であった。教育程度は全体に高く、60% 以上が "Matura" (高校卒業資格) で、コントロール群とほぼ同程度、48% が大学或いは専門大学卒業で、コントロール群より優位に高かった。67% が、通常の労働環境か自由業。42% が伴侶ない子どもをもうけている。35% が独身、15% が両親又は親戚と住み、9% が施設であった。

われわれは、この点に関連して、10 年以上にわたる滋賀大キッズカレッジの臨床的経験から、アスペルガー症候群の子どもたちは、適切な理解と指導があれば、「青年期に個性といってもよい状態にまで成長する」と明言してきた。ただし、そのためには、年少時には、その困難の大きさ、不安の強さを「障害」と理解することが重要である。「障害か個性か」ではなく、彼らが自ら成し遂げる「障害から個性へ」の発達の变化である。そのためにこそ、学習であれ社会性であれ、個別細分化されたスキルの反復訓練ではなく、「拒否」を表現の出発点とするところから主体的能動的活動（意欲・意図－認識・見通し－実行・試行錯誤のサイクル）を完全に保障するいわば主体－主体の関係性の醸成を基盤にして、指導者の確たる発達の見通しに基づく教育的指導こそが発達障害の教育にとって有効性を発揮する。H.Asperger が強調してやまない子どもの「全体性」の把握、子どもの内面から生起する本質的なものへの直観的感性が教育者にとって求められる、ということはわれわれ滋賀大キッズカレッジの理論的、実践的認識と共通する。個別スキルの反復訓練の流行を今日のわれわれも目にするか？それは、H.Asperger に反し、われわれとも相入れない。

### 3.1938 年論文の沈黙と国家社会主義への態度

ウィーンには、1940 年 7 月 24 日に Heil- und Pflegeanstalt 'Am Steinhof' (アム・シュタインホフ治療・保護施設) の敷地に「ウィーン市アム・シュピーゲルグント青少年保護施設」として 640 ベットを有する小児専門部門が設立された。1942 年 5 月に「ウィーン市立アム・シュピーゲルグント治療教育クリニック」に改称されている。オーストリアでは 1939 年から強制的断

種が行われ、1940 年 6 月 24 日から 1941 年 6 月 23 日までに 1583 人の子どもがウィーンの教育施設から Am Spiegelgrund に送られ、少なくとも 789 人の障害児がそこで殺されたことが記録されている<sup>52,53)</sup>。施設の名前はその後変更され、終戦まで存続した。毎日、6 人から 10 人の障害児が殺された、と関与した Dr.Tuerk は証言している。ウィーンは、ナチスドイツによる障害者殺戮の中心地の一つであった。とりわけ、ウィーン大学の小児クリニックとこれら障害児施設は緊密に連携していたが、Dahl(2000) の論文に、H.Asperger の名前はない<sup>54)</sup>。

H.Asperger の 1938 年論文が広く知られるようになったのは、Felder(2000) の序<sup>55)</sup> および Brita Schirmer(2002) の論文<sup>56)</sup> によってであり、これによって通説とは異なり自閉症の第一発見は H.Asperger であることが明らかになったが、同時に B.Schirmer はこの論文のもとになった 1938 年の講演が、ナチスによるオーストリア併合を直前にしてナチスの障害者撲滅政策に対する抵抗であったと位置づけ、その後の H.Asperger 評価を方向付けた。一方、欧米の実証的歴史研究の多くは H.Asperger が「アンビバレント」「両面性」であることを指摘する。医学関係者がナチスの安楽死政策に積極的に関与したことが大きな特徴であるドイツとスイスで、29 人の医学者から名前がつけられた神経学的疾患についてレビューを行ったスウェーデンの Daniel Kondziella(2009) は、当時の医学者を、①積極的関与者、利益享受者、②反ナチ、抵抗者、③中間的立場の 3 つに分類しているが、H.Asperger は、「中間的立場 (ambivalent roles)」に位置づけられている<sup>57)</sup>。理由は、「第二次大戦中にクロアチアでドイツ軍に従軍したこと。ナチ政治に理由不明の隠された同調者として告発された。知的障害児を好意を持って擁護した」というものである。それにしても、当の H.Asperger 自身がこれほど重要な 1938 年論文について生涯一言も触れることなく、まったく沈黙する道を選んだのは何故か？未だに不可解なままである。

H.Asperger が高校生時代からワンダーフォーゲル運動に熱中し、森と山を歩き回り、自然と一体化することを楽しむ感性を豊

かに持っていたこと、この活動の中で生涯の伴侶を見つけたことは自らも語っている (Radiosendung 1978)。また、彼は、カトリック主義的民族優生学の立場に立ち、「新大地」(Neu Land) というドイツ主義的青年同盟に属してもいた。カトリック主義的民族優生学は、強制的断種に至るナチスの民族優生学とは異なっており、啓蒙と個人の意思に基づくことを強調する。

H.Asperger が、小児科の師と仰ぐ真性の国家社会主義者 Hamburger の思想、理念に対して H.Asperger が「どれほど対応し、どれほど追随したかは少ししかわかっていない」<sup>58)</sup>。2008 年の論文ではしかし、M.A.Felder(2008) はさらに具体的に、1930 年代の H.Asperger が、1934 年のある講演では国家社会主義政策に批判的態度を取り、1942 年の治療教育学ウイーン協会の講演 (「青少年精神医学と治療教育学」) では「われわれは遺伝病の子孫予防法と関連する諸問題において実践的 - 優生学的仕事の前面に立たなければならない」と述べていることを紹介している<sup>59)</sup>。日本においても太平洋戦争のさなかに障害者を守るために天皇制軍国主義の用語を用いた論考は数多く見られる。極限的な状況に置ける言葉の使用と本意との関係は単純ではない。Feinstein(2010)によれば、1957 年チューリッヒで大きな精神医学会が開かれた折にも、Asperger の研究は言及されなかった。この時代にナチス用語も使って書かれた Asperger の講演とその記録論文は理解されなかった (むしろ拒絶された) のであろう。Asperger も戦争の犠牲者であった、と Gillbert Lelord は語った<sup>60)</sup>。

1938 年論文と 1944 年論文の文章スタイルを緻密に分析した Marc Bush は、Asperger は、自らにゆだねられた子どもたちを守ろうとして「ナチス・スタイル」の語彙の中に論文を横たえた、「それが、1938 年論文が合衆国で受け入れられなかった理由であろう」と述べている<sup>61)</sup>。Feinstein(2010)によれば、Asperger の同僚であった Elisabeth Wurst も「Asperger は、ナチスに対して非常に明確な態度を取っていた」と証言している<sup>62)</sup>。

2002 年 出 版 の Gabriel, Eberhard und

Neugebauer, Wolfgang 編『強制的断種から殺戮へ』も、「H.Asperger の研究が NS- 精神医学にいかなる関係があったのかは今日に至るまで不明のままである」としている<sup>63)</sup>。ウイーン精神医学と国家社会主義の関係を歴史的に一貫して追及している H.Czeck(2014) は、A.Asperger はこの点については、客観的に「機関の一部であった」(Er war Teil des Apparats) と述べ、また障害者施設への送致を決定する「鑑定医」としての役割として、少なくとも 7 人の重度の障害児を障害者の収容施設“am Spiegelrund” に送る診断をしていることは確実であると証言している<sup>64)65)66)</sup>。1943 年 10 月から 1944 年 1 月までのナチスドイツ軍のクロアチアへの侵攻の際に武器庫軍医として配属されているが、Asperger 自身はその時「私は誰一人として撃たなくてよかったということが運命の最大の幸運であった」と後に語っている<sup>67)</sup>。

#### 4. H.Asperger の子ども観、教育観の意義

①われわれは、滋賀大キッズカレッジの理論的考察と実践的経験から、自閉症スペクトラム論における高機能自閉症との質的差異について、今日のアスペルガー症候群のとらえ方、治療方法が根本的に見直される必要があると考えている。

「アスペルガー症候群について有力な検証データがないという事態に直面する研究者の中には、保守的なアプローチとされる手法、すなわち自閉症とアスペルガー症候群をひとつの連続帯と見なす立場を取り、認知能力の障害を呈する自閉症の人と高次の認知能力を有するアスペルガー症候群の人がひとつの連続帯上に位置すると考える向きもある。しかし、アスペルガー症候群をどのように理解すべきかという問題をこのアプローチが解決するとはどういえない」という指摘も行われている<sup>68)</sup>。アスペルガー症候群は、H.Asperger によれば、「自閉性精神病質」であり、カナータイプにも共通するスペクトラムを構成する。しかし、スペクトラムだから質的差異はなく、あるのは程度の違いにすぎないというのは、子どもたちを発達の変化の中で見ない固定的で一面的な議論である。スベ

クトラム概念自体に様々な解釈が存在するが、連続帯と見ると同時に単なる量的差異（程度の違い）だけでなく、その全体性の理解からすれば質的差異を含むものと捉えるべきであると考えられる。

②個別科学、とりわけ認知科学、「脳科学」の知見はたとえ正しくてもそのまま教育実践に直結すべきものでない。「教育的なるもの」(H.Asperger)、「発達障害のある子どもの本質」(滋賀大キッズカレッジ)のフィルターを媒介項とすることが不可欠である。

対象を、際限なく細分化し、データとして集積して分析する実証主義的「行動科学」、人間主体を捨象したところに成立した認知科学<sup>69)</sup>の進歩と人間理解にとってのその危険は、情報化時代の今日ではH.Aspergerの時代とは比べものにならないほど大きくなっている。

③指導の根本は、「安心と自尊心」の保障と形成にある。

④発達障害のある子どもの現実態は、障害の併存と二次障害（「悪魔の循環」(Berninger)が「ルール」(一般的)である。とりわけ、アスペルガー症候群にあっては、思春期頃から鬱をはじめ様々な精神疾患様状態が起きてくること、しばしば指摘されているが、実は、併存障害の中でも学習障害の併存が頻繁に起きていることはあまり注目されていない。アスペルガー症候群の70%が少なくとも一つの併存障害を有しており、併存を考慮すべきであるという主張(Poustka,F. 2015)は、臨床および教育実践においては絶対的要請である。子どもの全体性という見地からすれば当然である<sup>70)</sup>。特に、スクリーニングとアセスメントの際にこの認識は不可欠である。大方の目を奪われやすい多動やアスペルガー症候群が疑われる場合、また反社会的行動が主たる課題と見える場合には、学習障害のアセスメントは不可欠である。

⑤指導に当たっては、長期の発達の見通しが不可欠である。10回や20回の絶対的にコントロールされたセッションの「実証的」な「実験結果」で発達にかかる教育指導を云々すること自体が教育学的なるものの論理からすれば論理的整合性を持たない。たとえ、同一プログラムの原理によっても、一人ひとりの「発達の原動

力と源泉」(田中昌人)の複雑な絡み合いの中で、必要とする関わりは一人ひとり異なってくるし、また指導方法も内容も変化していく。すべてが相互作用の連関と変化のプロセスの中にあって、普遍的で個別的な確かな変化が観察され、直観されまた事実として確認されるのである。一方で、エビデンスを軽視し、変化だけ見て事実の確認を怠る実践も発達を保障する実践とは言いがたい。われわれの実践的研究では、発達障害の子どもたちに最初の大きな飛躍的变化が観察されるまでに多くの例が2年の教育指導の期間を必要とし、さらに第二の飛躍を達成するまでには高校生の年齢までの経過が必要である<sup>71)</sup>。こうした発達の見通しにたった「教育的なるもの」による指導によって、H.Aspergerの子どもたちの社会性の変化と社会適応の良さが生み出されたのであると思われる。われわれは、それを発達障害のある子どもたちが「障害から個性に自己形成するプロセス」と観る。

### 「全体性」の復活についての補足

「全体性」の視点は、ある意味で時代精神へのアンチテーゼである。時代的な批判の対象は異なっていく。今日の「全体性」の要請が、アスペルガーの時代のそれと同じであるかどうかについてはよく考えてみる必要がある。H.Aspergerは、ドイツのワンダーフォーゲル運動への熱中、自然との一体感というロマンティズム、ゲルマン的精神の高揚などとおそらく不可分であったと思われる。とはいっても、近代を否定する中世礼賛とも異なっている。ドイツ治療教育学やスイス治療教育学と異なるオーストリアのHeilpädagogikの影響が大きかった。「教育的なるもの」が、ドイツやスイスと異なり「学校教育的なるもの」ではなかったことが、人格の全体的なるものへの視点を確保する点で重要であったといえる。70年代から80年代にかけて日本の教育学に「子どもを丸ごととらえる」という志向性が強調された時期がある。「丸ごと」とは本当に「丸ごと」の要請であったのかどうか、教育学的ジャーゴン、教育的言説の特異性を離れて、客観的に考察される必要がある。H.Aspergerの「全体性」は、その意味でことば通りの「全体性」

(社会的であり、生物学的であり、心理学的である)をとらえていた。今日の、高度に発達した情報化社会における行動科学、認知科学の発展に基づく細分化と精緻化、領域固有性の名による個別領域のATOM化などの極限化は、おそらくH.Aspergerの時代とは比べものにならないほど困難な状況にある。近代科学を全否定する「臨床の知」で対抗できるとも思えない。分析と総合の統一としての弁証法的方法論の教育学と発達科学における有効性が問われている。「接触到困難がある子どもの取り扱いにとってのもう一つの前提は、教育者自身の慎み、すなわち純粋に実質的な要請へと身を引くことである」。ここには発達障害とりわけアスペルガー症候群の子どもの教育指導における重要な示唆がある。われわれは、子どもをみるとき、「いま何年生だからこれぐらいできてあたりまえ」という見方をとらず、本質的に重要なこと(「実質的な要請」)に焦点化して対応する。たとえば、多動性のある子どもが席を立ち歩いたとしても、そのとき子どもが集中すべきこと、注意を向けるべきことに注意を向けていれば立ち歩きは良しとする。もし、そのとき指導者が子どもの表面的な動きに気をとられ、子どもの内面的努力に目を向けずに、動き回ることに注意し、制止するならば、子どもの注意は自分の体の動きと他者の目に集中し、注意すべきこと、注意を向けるべきことに注意を向けることができないという逆説が生じるであろう。われわれは、発達障害の子どもは「まじめで、一生懸命、やさしい」という本質的特徴を持つと捉えているが、ここに指導者が確信を持てるかどうかは鍵となる。H.Aspergerの「教育的なるもの」は、滋賀大キッズカレッジにおけるわれわれの指導理念および実践的方法と重なり合う。

#### H.Asperger年表 (M.A.Felder 2008より)

- 1906.2.18 ウイーンに生まれる。両親は、Hausbrunn/Niederösterreich出身のSophie und Johann Asperger。  
1909年生まれの弟のKarlは、1942年ロシアで死亡。  
ウイーンの小学校に通う。  
1925.6.20 ウイーンのギムナジウムに入学。中

等学校時代に青年運動「新大地同盟」(Bund Neuland)に出会う。長時間のヴァンデルングと登山

- 1925 ウイーン大学医学部  
1931.3.26 医学博士に昇進  
1931.5.1 Franz Hamburgerの指導の下で、ウイーン大学児童クリニックに就任  
1932年4月 ウイーン大学子どもクリニックの治療教育施設、Viktorine ZakおよびJosef Felderとともに従事  
1935～ ウイーン大学子どもクリニック治療教育施設長  
1935.7.10 Hanna Kalmonと結婚、5人の子どもをもうける。Gertrud1936, Hans1938, Hedwig1940, Maria1946, Brigitte1948  
1938 論文>Das psychisch abnorme Kind<の中で"Autistische Psychopathen"の概念の最初の使用。  
1943 学位論文: Die autistischen Psychopathen im Kindesalter  
1943.3.10 教授資格取得  
1944年1月よりクロアチアで武器庫軍医として従軍  
1945.8.30 ウイーンへ帰還。子どもクリニックに再任。  
1946-1949 ウイーン大学子どもクリニックの暫定的所長  
1957-1962 インスブルックの大学子どもクリニック所長(1957.5.7就任講演)  
1962-1977 ウイーン大学子どもクリニック所長(1962.10.10就任講演)  
1967 Hall/Saaleの「自然科学者及び医師 Leopoldina」アカデミー会員  
1972 ミュンヘン大学クリニック名誉博士  
1977 退職。1980年秋まで講義「人間理解への道」の継続  
1980.10.21 ウイーンでの短期治療の後、突然の死去

#### 注および参考文献

- 1) Otto Speck(1991):System Heilpädagogik: Eine ökologisch reflexive Grundlegung Gebundene 2. aktualisierte Aufl.München : E. Reinhardt, 1991

- 2) Kathrin Hippler (2008) :Asperger-Syndrom über die Lebensspanne. Arnold Pollak(Hrsg.):Auf den Spuren Hans Aspergers-Fokus Asperger-Syndrom: Gestern,Heute,Morgen. Schattauer 2015, 59-65
- 3) Manfred Berger(2007):H.Asperger-Sein Leben und Wirken. heilpädagogik, 2007, 4,29-32
- 4) Helmut Groeger: Zur Ideengeschichte der medizinischen Heilpädagogik — Hans Asperger und das Syndrom des »Autistischen Psychopathen«. 30-37, In: Arnold Pollak(Hrsg.):Auf den Spuren Hans Aspergers-Fokus Asperger-Syndrom: Gestern, Heute, Morgen. Schattauer 2015
- 5) Viktoria Lyons · Michael Fitzgerald(2007); Asperger (1906–1980) and Kanner (1894–1981), the two pioneers of autism. J. Autism Dev. Disord. (2007) 37:2022–2023
- 6) Frith,Uta(1991):Asperger and his syndrome. In U. Frith (Ed.), Autism and Asperger Syndrome. Cambridge University Press(pp. 1-36).
- 7) H.Asperger(1968):Heilpädagogik.Fünfte unveränderte Aufl.Springer Verlag Wien  
H. アスペルガー 著：治療教育学 第4版 黎明書房 1973年（原著第4版1965、第1版は1952年
- 8) Adam Feinstein(2010) : The Two Great Pioneers. In; A History of Autism: Conversations with the Pioneers. Published Online: 29 JUN 2010 Wiley-Blackwell, 9-36
- 9) ウタ・フリス(2012)：ウタ・フリスの自閉症入門 中央法規 2012
- 10) 石川元編 (2007)：アスペルガー症候群歴史と現場から究める  
石川元 (2007)：アスペルガー症候群の歴史 10-51 石川元編 (2007) 所収, 至文堂 2007
- 11) 神内幾代 (2007)：ハンス・アスペルガーによる「自閉性精神病質」と「治療教育学」 52-62 石川元編 (2007) 所収
- 12) 加戸陽子、眞田敏、齋藤公輔、Johannes Plan：ハンス・アスペルガーの1938年講演論文と ウィーン大学の治療教育、関西大学人権問題研究室紀要：第66号, 1-21 2013
- 13) H.Asperger(1968): 同上
- 14) Michael Fitzgerald(2008) : Autism: Asperger's Syndrome-History and First Descriptions. In:Jeffrey L. Rausch, Maria E. Johnson, Manuel F. Casanova (ed) : Asperger's Syndrome. Informa 2008, 1-6
- 15) Adam Feinstein(2010) : 同上
- 16) Interview mit dem Kinderarzt und Heilpädagogen Hans Asperger :Titel Geschichten und Geschichte - Autobiographische Aussagen von Hans Asperger. 1978.03.28  
<http://www.mediathek.at/atom/01782B10-0D9-00CD5-00000BEC-01772EE2>
- 17) Arnold Pollak(Hrsg.):Auf den Spuren Hans Aspergers-Fokus Asperger-Syndrom: Gestern, Heute, Morgen. Schattauer 2015
- 18) Ernst Tatzer(2006):Ist Heilpädagogik Kinderpsychiatrie? heilpädagogik 2006.3, 24-27
- 19) M.Theresia Schubert und Elisabeth Wurst (2006):Die Winer Heilpädagogik als interdisziplinärer Forschungs-und Behandlungsansatz auf basis des biopsychosozialen Modells. heilpädagogik 2006.3, 16-23
- 20) S.Tschiesner(2011) : Ist Heilpädagogik Kinderpsychiatrie? heilpädagogik 2011.1, 2-5
- 21) 富長光昭 (1990)：ハインリヒ・ハンゼルマンにおける発達抑制理念の形成 - その歴史的意義と限界、特殊教育学研究、27-4, 21-32
- 22) Ernst Tatzer(2006): 同上
- 23) Ernst Tatzer(2006): 同上
- 24) H.Asperger(1968): 同上
- 25) H.Asperger(1968) : 同上
- 26) H.Asperger(1968) : 同上
- 27) Wolfgang Brezinka(1997):Heilpädagogik



- an der Medizinischen Fakultät der Universität Wien-Ihre Geschichte von 1991-1985. Z.f.Päd.43Jg.1997.Nr3. 395-420
- 28) Dieter Lotz(2008):Heilpädagogik und ihre Diagnostik-Aufgaben und Ziele-, Darmstadt
- 29) Georg Antor,Urlich Bleidick(Hrsg.);Handlexikon der Behindertenpädagogik. Kohlhammer 2001
- 30) Konrad Bundschuh(2006);Vorlesung Spannungsfeld Heilpädagogik und moderne Leistungsgesellschaft
- 31) Dieter Lotz(2008) : 同上
- 32) Wolfgang Brezinka(1997) : 同上
- 33) W.Datler(1988):Nachbemerkenngen zu meiner Artikel(1987.H.5) anlässlich redaktioneller Textänderungen, heilpädagogik 1988,42-45
- 34) Manfred Berger(2007):Hans Asperger-Sein Leben und Wirken. heilpädagogik, 2007.4,29-32
- 35) Heinz Gruber,Adolf Joksch (2006) : editorial, heilpädagogik.3.2006 S.1
- 36) Maria Asperger Felder(2006): Zum Sehen geboren, Zum Schauen bestellt ...” heilpädagogik 2006.H.3. 2-11, Maria Asperger Felder(2008): 》 Zum Sehen geboren,zum Anschauen bestellt 《 Hans Asperger(1906-1980):Leben und Werk. In;Rolf Castell(Hg.):Hundert Jahre Kinder- und Jugendpsychiatrie. V&R unipress 2008
- 37) Maria Asperger Felder(2015):Zum Sehen geboren, Zum Schauen bestellt...” In;Arnold Pollak(Hrsg.);Auf den Spuren Hans Aspergers-Fokus Asperger-Syndrom: Gestern, Heute, Morgen. Schattauer 2015. 3-43
- 38) Maria Asperger Felder(2015): 同上
- 39) Maria Asperger Felder(2008) : 同上
- 40) H. アスペルガー 著 : 治療教育学第4版 黎明書房 1973年 p.84
- 41) H.Berger(1976):Professor Dr.Hans Asperger zum 70.Geburtstag, Pädiatrie & Pädologie,11.1976. 1-4
- 42) Maria Asperger Felder(2006): 同上
- 43) Maria Asperger Felder(2015) : 同上
- 44) Maria Asperger Felder(2006): 同上
- 45) Mathias Dahl(2000):Die Tötung behinderter Kinder in der "Am Spiegelgrund" 1940 bis 1945. In;Eberhard Gabriele/Wolfgang Neugebauer(Hr.) NS-Euthanasie in Wien, Boehlau 75-92
- 46) H.Berger(1976):Professor Dr.Hans Asperger zum 70.Geburtstag, Pädiatrie & Pädologie,11.1976. 1-4
- 47) H.Asperger(1944): Die 'autistischen Psychopathen' im Kindesalter. Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten,117, 76-136. (Hans Asperger: 小児期の自閉性精神病質、自閉症と発達障害研究の進歩 Vol.4 2000. 30-68)
- 48) H.Asperger(1968) : 同上アスペルガー著 p.95
- 49) H.Asperger(1968) : 同上アスペルガー著
- 50) F.Wurst:Vom Gespür(1976);Pädiatrie und Pädologie 11. 5-11.1976
- 51) Kathrin Hippler (2008) :Asperger-Syndrom über die Lebensspanne,Arnold Pollak(Hrsg.);Auf den Spuren Hans Aspergers-Fokus Asperger-Syndrom: Gestern,Heute,Morgen. Schattauer 2015. 59-65
- 52) Ferdinand Holub(2012):Sonder- und Heilpädagogik im Nationalsozialismus-Teil 2 heilpädagogik 2012.1. 15-22
- 53) Gabriel M. Ronen et al.(2007):From Eugenic Euthanasia to Habilitation of 'Disabled' Children: Andreas Rett's Contribution, <http://jcn.sagepub.com> at MCMaster UNIV LIBRARY on January 28, 2009. 115-127
- 54) Mathias Dahl(2000):Die Tötung behinderter Kinder in der "Am Spiegelgrund" 1940 bis 1945. In;Eberhard Gabriele/Wolfgang Neugebauer(Hr.) NS-Euthanasie in Wien, Boehlau 75-92
- 55) Maria Asperger Felder (2000) :Foreword, In;Klin. A., Volkmar, F.R., Sparrow, S.S.

- (eds.) Asperger Syndrome. New York: The Guilford Press (総説 アスペルガー症候群, 明石書店, 5-8).
- 56) Brita Schirmer(2002):Autismus und NS-Rassengesetze in Österreich 1938: Hans Aspergers Verteidigung der »autistischen Psychopathen« gegen die NS-Eugenik erschienen in Hans Aspergers Verteidigung der ‚autistischen Psychopathen‘ gegen die NS Eugenik. In: Die neue Sonderschule 47 (2002) 6, S. 460-464.
- 57) Daniel Kondziella(2009):Thirty Neurological Eponyms Associated with the Nazi Era. Eur Neurol 2009; 62: 56-64
- 58) M.A.Felder (2008) :
- 59) M.A. Felder(2008)
- 60) Feinstein (2010)
- 61) Feinstein (2010)
- 62) Feinstein (2010)
- 63) Gabriel,Eberhard und Neugebauer, Wolfgang (Hg.) : Von der Zwangssterilisierung zur Ermordung. Buehlau Verlag 2002
- 64) Hewig Czech(2015):Hans Asperger und die »Kindereuthanasie« in Wien - mögliche Verbindungen ... In:Auf den Spuren Asperger 24-29
- 65) Hewig Czech:Dr Hans Asperger in National Socialist Vienna - Youth Welfare, Race Hygiene,„Euthanasia “
- 66) Christa Hager(2014):Interview : Hans Asperger - "Er war Teil des Apparats" Wiener Zeitung 31.03.2014
- 67) Felder (2008):Rolf Castell(Hg.):Hundert Jahre Kinder- und Jugendpsychiatrie. V&R unipress 2008
- 68) アミー・クライン他編：総説アスペルガー症候群 明石書店 2008,オリジナル 2000 序 (アミー・クライン他)
- 69) 大東祥孝：神経心理学の新たな展開 —精神医学の「脱構築」にむけて— 精神神経学雑誌、108 巻 第 10 号 (2006) 1009-1028
- 70) Fritz Poustka (2015) : Autismus-Spektrum-Störungen - Hans Asperger und klinische Aspekte, heute, In; Pollak: Auf den Spuren Hans Asperger. 1-14
- 71) 久保田璨子・岩堀由美子・窪島務・堀口真理子 (2014) ; LD 学会自主シンポジウム : 発達障害児 (アスペルガーと LD の併存) の発達プロセスの検討～「安心と自尊心」を基本とする滋賀大キッズカレッジの指導の中で急激な発達の変化を見せる子どもたち～

